

# 日本における 近代的価値観と宗教意識の変質<sup>1)</sup>

金 児 曉 嗣

## 要 旨

近代化（現代化 modernization）ということばは、捉える範囲により多様な意味内容を伴ったきわめて包括的な概念である。しかし、そうした意味内容の多様性にもかかわらず、社会全体とそこで生活する人間の価値観や行動が合理的、計画的、機能的、組織的な性質を強めていく過程が近代化であると考えてよいだろう。

価値観のひとつである宗教観についていえば、日本人の宗教意識は工業化と都市化と近代化の過程で大きく変化し、伝統的な宗教（見える宗教 visible religion）は後退を余儀なくされている。しかし一方で、近年、若年層の間に年長世代とはちがった宗教観が見られる。本研究では、いわばポスト・モダニズムの宗教観とでも呼べる宗教意識について論じることにした。

キーワード：近代合理主義、向宗教性、加護観念、靈魂観念、宗教行動、祖先崇拜

## 1. 宗教に対するイメージ

「宗教」という言葉から何を連想するだろうか。うさん臭い、非科学的、現実逃避、暗い、老人、金もうけ、新興宗教<sup>2)</sup>、靈感商法…。こういったネガティブなイメージが宗教にある。しかし他方においては、心のよりどころ、救い、安息、幸せ、天国（極楽）、抱擁など、ポジティブなイメージをもつ人たちもいる。ネガティブ派とポジティブ派を分かつものは何だろうか。筆者の勤務する大阪市立大学の学生たちに「宗教について思うところ」を自由に記述してもらったことがある。それらの文章から、2つのイメージをおおよそ次のように集約することができる。

ネガティブ派では、特定の宗教やその教祖を信じたり、時にはマスメディアを通じて世間を騒がせたりするような行動をとる人びとを批判

している。また、そうした拒否的態度は、既成宗教よりもいわゆる新宗教に対する場合が多い。そして、合理的な見方と自律性を身につけているならば、宗教にすぎるといような行動は起こりようがないとしている。このような見方は、近代化と都市化に伴って顕著になるものであり、科学的合理主義的な考えに基づいているがゆえに、どちらかといえば女子よりも男子に多く見られる（資料1参照）。

ポジティブ派は、科学的合理性では解決できない諸問題が宗教によって解決される可能性を評価している。大学生の記述のなかには、釈尊の四門出遊を思わせるような、高度な実存的関心から宗教を信じていることうかがわせるものもある（資料2参照）。

しかし実のところ、上に述べたような、宗教に対する両極端の見解は比率からいうと意外に少ない。「宗教について、あなたの意見に近い

のは次のどれですか」という質問に対する学生とその両親の回答を示したのが図1である。これを見ると、「宗教は、それを信じる以上は深く関わらなければ意味がない」という積極的肯定論と、「宗教は、それに深く関わるのはもちろん、“たしなむ”必要もないものだ」という積極的否定論は少なく、むしろ「宗教は、それを信じて深く関わるよりも、“たしなむ”程度がよい」という消極的肯定論が大勢を占めていることがわかる。そして、親世代になると積極的否定論がさらに後退し、消極的肯定論の割合がいっそう大きくなっている。図1には世代の違いを見るための参考資料として、高齢者（平均年齢70歳）の回答結果も示した<sup>3)</sup>。一般に洋の東西を問わず、年をとるにつれて人は宗教に好意的態度を示すようになるが、高齢者といえども積極的肯定派は大学生の親世代とほとんど変わらず、わずかに消極的肯定派が増えているだけである。してみると、宗教は大切であるが節度をもってそれに親しむのがよいとする見方が、大方の日本人に共通した態度であるといえる。

消極的肯定論の意見を要するに、あくまで習俗として関わりをもち、神仏は困った時にすがれる存在とみなし、宗教の説くところを教養として身につけることはあっても、けっして特定の宗教に深く傾倒しない、ということになる(資料3参照)。日本人の宗教との接し方が、「信仰のない宗教」だとか「たしなみの宗教」だとかいわれる所以である。このような消極的肯定論が日本人の宗教への態度を代表するものとするれば、その中身について考えてみる必要がある。つまり、若者も含めて多くの日本人は、具体的にいったい何を信じ、どのような宗教行動をとっているのか、そしてそれらの背景にある日本人の心性とは何か、ということを経験的に把握しなければならない。

## 2. 宗教的態度

日本人の宗教的態度については、筆者による因子分析を中心とした一連の計量的研究によって、向宗教性、加護(報恩)観念、靈魂(応報)

観念の3つが析出されている(金児, 1997)。向宗教性とは、一般的な意味で宗教に対して好意的態度(接近)を示すのか、否定的態度(回避)をとるのかという次元に関するものである。加護観念は、風俗や年中行事としての軽い宗教との結びつきに親しみを感じ、自然にも敬虔な気持ちをもった宗教性である。これが強く働くと仏神への報恩感謝の念となり、オカゲさまという恩情感がこの宗教性の中核を成す。靈魂観念とは、靈的存在への信仰、死者への畏怖の感情、あるいは願いごとをかなえてくれたり、祟りや罰を与えたりするような人知を超えた存在に対する畏怖の念、あるいは輪廻転生を信じることで、そうした観念の複合したものである。いわゆるタタリ意識という情念の観念に相当するといえる。したがって、向宗教性とは常識的な意味での宗教、つまり教団・教義・戒律といった目に見える要素から成る宗教に対する態度であるのに対して、加護観念と靈魂観念は、日本人の心の深層に隠れている原始的な心性—民俗宗教性あるいは固有信仰—であり、当人もそれを宗教であるとは通常意識しない宗教性であるといえる。オカゲとタタリという二つの観念は、平生はオカゲさま、変事があればタタリというように、あるいは菅原道真の怨霊(→タタリ)が御霊信仰となり、そしていつの間にか天神信仰(→オカゲ)となったように、日本人の宗教性の複合体を構成しているのである。

図2は3つの宗教性を測定する尺度<sup>4)</sup>を構成して、大学生とその両親の程度を示したものである。これらの結果について、注目すべき3点を指摘することができる。まず、向宗教性に現われた結果から、若者は実体的な意味での宗教—いわゆる教団、教義、戒律をイメージさせる見える宗教—に対して否定的な態度をもっていること。加護観念と靈魂観念の2つの固有信仰のうち、前者に対しては4群とも肯定的であること(賛成でも反対でもない中立点2.5を有意に超えている)。そして、後者の靈魂観念については父親が否定的態度を示すのに対して、女子は逆に強い肯定的態度を有していることである。

親子の違いについてももう少し突っ込んでいえば、向宗教性と加護観念は親の方が、靈魂観念は子どものほうが濃厚である。また、男女間の

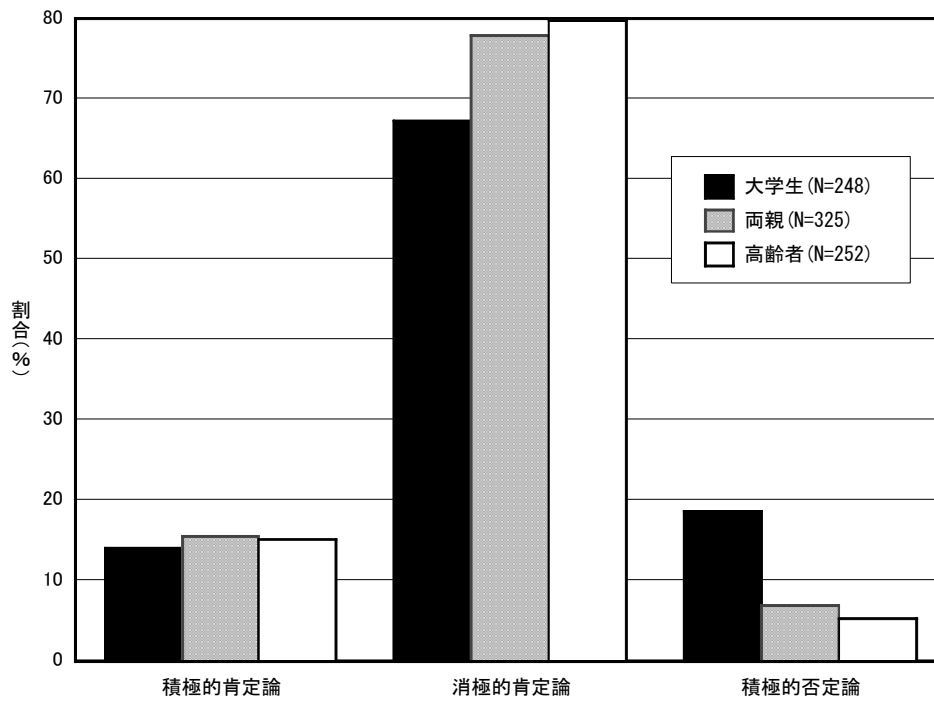


図1 宗教に対する見解

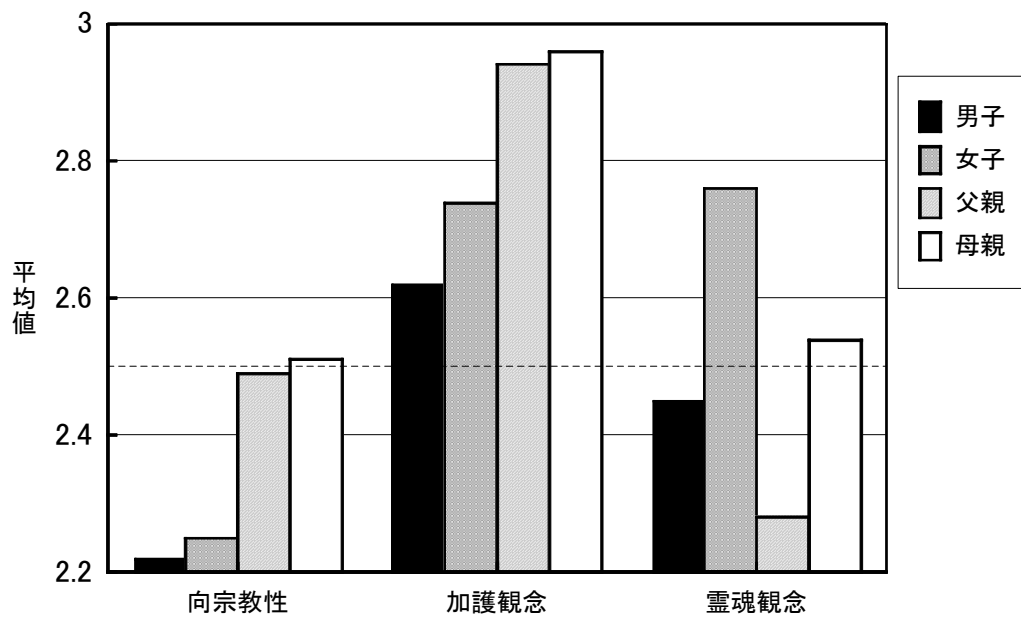


図2 親子の宗教観尺度の平均値

(注) 点線は尺度の中立点（どちらでもない）を示す

有意な差が靈魂觀念に見いだされ、女性は男性よりも靈魂觀念が強いことが認められる。靈魂觀念が両親よりも子どもに、男性よりも女性に濃厚なことは、1980年代以降、とくに若者に顕著に見られる靈術系新宗教現象や精神世界への志向現象が、主として女子によって担われているものであることを意味する。

以上の3つの宗教的態度は、宗教行動との関連でいえば、向宗教性は「聖典・経典など宗教関係の本を折にふれ読む」、「信仰グループへの参加」、「礼拝、おつとめ、布教など宗教的な行いをしている」といった自己修養的行動に、加護觀念は「墓参り」、「祖先や亡くなった肉親の霊をまつる」、「仏壇にお花やお仏飯をそなえる」といった慰霊的行動に、靈魂觀念は「おみくじを引いたり、易や占いをしてもらったりすることがある」、「お守りやおふだなど、縁起ものを身のまわりにおいている」、「身の安全や商売繁盛、入試合格などの祈願」などの現世利益的行動にそれぞれ密接に関連している。

### 3. 宗教行動

筆者は1986年以降毎年、勤務する大阪市立大学の新生やその両親に宗教意識や宗教行動に関する調査を実施して、その年次的変遷を見てきたが、この10数年の間に目立った変化はない。しかし、30年ほど前に比べると大きな変化がある。このことを宗教行動について見ることにしたい。ここでは自己修養的行動として「ふだんから礼拝、おつとめ、布教など宗教的な行いをしている」、慰霊的行動として「墓参り」、現世利益的行動として「お守りやおふだなど縁起ものを自分の身のまわりにおいている」ととりあげ、今から約30年前と現代とを比較してみよう<sup>5)</sup>。また、青年、中年、高齢者の3世代の違いも見ることしよう。これを示したのが図3である。

図3に70年代とあるのは、1973年にNHK放送世論調査所が行った「日本人の意識」調査の結果である(平均年齢:若者19.6歳, 中年49.5歳, 高齢者67.0歳)。90年代とあるのは、筆者が1990年から1997年にかけて収集した

資料で、若者は大阪市立大学の学生(平均年齢19.3歳)、中年はその両親(平均年齢49.0歳)、高齢者はお年寄りを対象とした市民大学講座の受講生(平均年齢69.5歳)である。70年代と90年代のそれぞれのサンプル群は平均年齢がほぼ同じであるので、単に昔と今の違いということにとどまらない興味深い分析ができる。それは同時代者の宗教行動の変化である。出生時期が同じ人びとは、同一の時代的背景のもとで歴史的・社会的体験を共有することによって共通したものの見方や行動様式をもつようになる。そうした同時代者集団(同時出生集団)が昔と今とではどう変化しているかを見ることも可能である。いわゆるコーホート分析であるが、時系列的变化を解明するのに有効な手法である。図の70年代の若者は90年代ではすでに中年になっている。また、70年代の中年は今の高齢者に相当する。このようなことを念頭において図を見ると、宗教行動の変化が、加齢によるのか(時代の影響によらずどの人にも共通に生起する影響要因)、同時代者集団の違いによるのか、あるいは時代(自然・社会環境により人びと全体に及ぶ影響要因)によるのかを明らかにすることができる。

#### 慰霊的行動

まず、「墓参り」から話を始めよう。墓参り行動は日本人がとりわけ慣れ親しんでいる宗教行動であるが、3つの宗教行動のなかでもっとも多くの人にとられていることが図にもよく表われている。一般に年をとると、亡くなった人を偲んでお墓にお参りすることが多くなるが、図はこの事実をよく示している。70年代、90年代いずれにおいても、年を重ねるにしたがって墓参りをする人が増えている。また、30年前に若者であった人たちの44%しか墓参りをしていなかったけれども、その人たちが中年になった今、81%もの人たちがこの行動に関わるようになってきている。70年代には中年の墓参りが73%であったのが、彼(彼女)らが高齢者の仲間入りをした現在、それが86%に上昇している。これらは加齢による効果を示している。

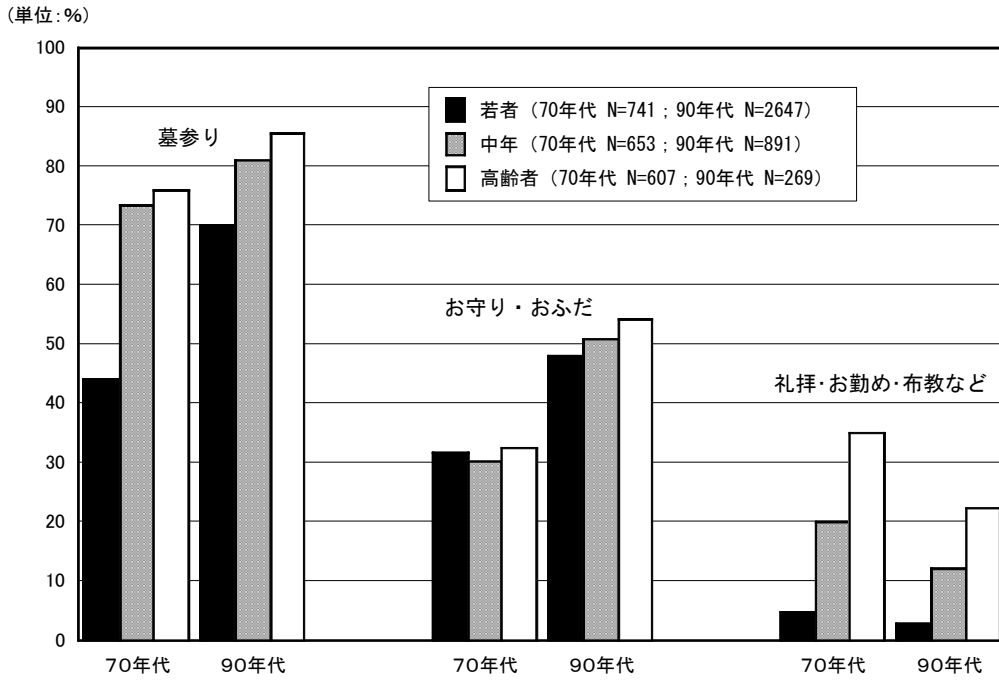


図3 70年代と90年代における宗教行動の比較

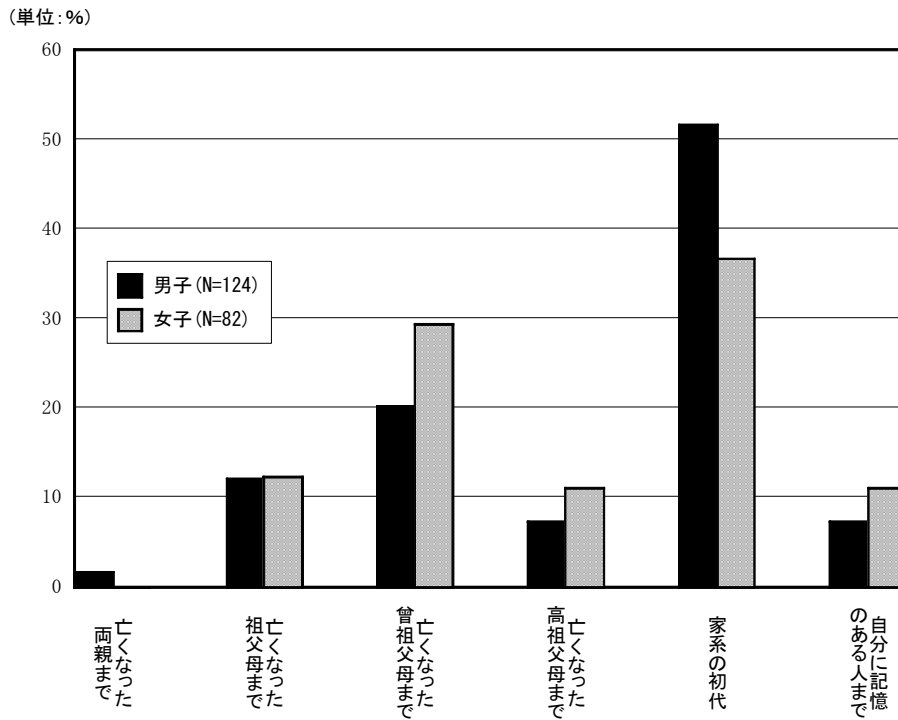


図4 大学生にとって祖先とは？

しかし、墓参行動の増加は加齢によるものだけではない。注目すべきことは、どの世代においても30年前に比べて墓参行動が増大していることである。とくに、若者の増え方は驚異的ですらある。ここには時代の要因が働いている。

だが、現代という時代に、世代を問わず墓参りが増えてきたのはなぜだろうか。

墓参行動は亡くなった祖先に対する慣習化した儀礼であるが、そうした慰霊行動が現代という時代にむしろ盛んになってきた背景には、祖先観念の変化があるようだ。いわゆる祖先崇拜は、日本社会の親族制度あるいは「家」制度と密接に結びついてきた。つまり、「家」の永続性と系譜性を支える働きをもっていた。このような祖先観念が定着したのは、中世の浄土思想の影響にもとづいた、死者を供養するという観念がその始まりであるが、庶民にまでそれが浸透するのは、近世幕藩体制のもとで寺社統制がなされて以降のことである。さらに、明治維新以降、国家神道の確立とともに、祖先祭祀が国民の義務として位置づけられ、イデオロギーとしての祖先祭祀が、家を基盤として国家にまで拡大されるに至った。その意味で、墓は「家墓」であったし、現代でも「家墓」としての墓観念をもっている人も多くいる。そうした観念は、「〇〇家(先祖代々)之墓」と墓碑に刻むことに象徴されている。

ところが、核家族化した現代社会にあっては、こうした祖先観念はどれも稀薄化してきたようである。大阪市立大学の学生に「祖先や先祖とは、あなたにとってどれくらい前の人を指しますか。仮定上のことも含みます」と質問してみた。この回答結果を示した図4を見ると、祖先観念は大きく変化していると見てまちがいないだろう。従来、祖先とは「家系の初代」と理解されてきた。この回答が現代の若者にももっとも多いとはいえ、それは半数に満たず男女合わせて46%にすぎない。次いで多いのは、「ひい爺ちゃん・ひい婆ちゃん」という回答で、これが24%である。曾祖父母がまだ健在な学生もいるだろうが、亡くした学生にとっては身近な存在であるし、会ったこともない学生にとっても、曾祖父母のことは親から伝え聞いている存在であるにちがいない。要するに、曾祖父母はリア

リティのある人たちで、亡くなったひい爺ちゃん・ひい婆ちゃんは墓の前で偲ぶことができる存在なのである。「高祖父母」(9%)になると回答率が急激に低下しているのも、学生たちはそれにリアリティを感じないからである。さすがに「両親」(1%)という回答はゼロに等しいが、「祖父母」(12%)にしても「曾祖父母」にしても、これらはすべて身近な人たちである。そこで、「自分に記憶のある人たち」(9%)という回答も含めると、46%がリアルな存在こそ祖先にふさわしいと考えているようである。そして、注目すべきは、それが女子の方に多く見られることである。

昭和40年代から50年代半ばまで、民営霊園墓地の典型例は公園墓地と呼ばれるもので、墓地が郊外・丘陵地に建設されるようになり、散歩道やサイクリング・コースなど遊びの要素も加えて、家族連れのピクニックも兼ねる霊園づくりが業者の主流をなしてきた。そうした墳墓を散策すると、「〇〇家之墓」に代わって、「寂」「浄」「愛」「やすらぎ」「さようなら」などと刻んだ墓碑が目立つようになっている。このことは、墓を祖先祭祀の対象として捉える意識が少なくなっていることを表わしている。つまり、「家墓」から「家族墓」への変化がある。森謙二(1993)は『墓と葬送の社会史』のなかで、こう述べている。

「先祖とともに祀られるよりも、死者は、生前親しかった人々、自分とともに暮らした妻や子供たちと一緒に葬られることを望み、墓地は愛するものを失った家族がその死者を追悼する場になったのである。死者は生前に自らが用意した墓地に埋葬され、そこで生前に愛した人々との再会を望むのである」(24頁)。

要するに、家族形態の変化も家意識の変化も祖先観念の変化も、それぞれ密接に関連して墓参行動の増大をもたらしている。家系単位の従来の形態を超えた墓へのニーズが優勢になり、これが「家墓」ではない「家族墓」として一般化しているが、この「家族墓」を超えたところに「個人墓」「夫婦墓」「生前墓」「仲間同士の墓」「総合墓」を位置づけることができる。さらには、「散骨」などは墓そのものを否定する思想

である。このような墓地観はすべて旧来の家の束縛から完全に解放されたものであり、とくに中年女性に顕著な傾向だ。そうした観念を社会意識の面から考えてみると、日本人は組織・集団への帰属意識が稀薄化しているということになろう。それが稀薄化すればするほど、逆に人は個人的な関係を重視することになる。そうでなければ人は孤独・孤立に陥ってしまうからだ。このところがポイントで、故人を偲ぶ墓参行動の増大は、個人的関係を人びとはより重視するようになったことに起因している。この意味で、墓参りは現代の時代精神を映しており、そこに人びとの人間関係観を見ることができるのである。

#### 現世利益的行動

先の図 3を見ると、「お守りやおふだなど縁起ものを自分の身のまわりにおいている」行動は、70年代においても90年代においても、年齢による違いはそれほど大きくないので、加齢による効果はほとんどないようである。しかし、70年代と90年代とを比較すると、現代はどの世代も30年前よりも現世利益行動に非常に熱心になっていることがわかる。同時に、30年前に若者であって今中年の人たちは32%から51%に、30年前に中年であって今高齢にある人たちは30%から54%に「お守り・おふだ」がそれぞれ増加している。これらのことから、現世利益行動の増大は現代という時代がもたらしたものであると判断できる。この増大が世代を問わず起こっていることは、現代社会に生きる人びとの不安を表わしているといえまいか。

ここでは、たまたま「お守り・おふだ」をとりあげたが、他の種類の現世利益行動では年齢による違いが認められる。「お守り・おふだ」は、それほど積極的な現世祈願行動ではないので、年齢の違いが顕著に現われないのかもしれない。しかし、たとえば「おみくじを引いたり、易や占いをしてもらおう」といった行動を考えると、それには“遊び”の要素も多分にあるだろうが、自己の将来に対してなにかの不安があり、その不安を解消するための指針が欲しいからなされる、といってよいかと思う。こうした種類の現世利益行動については、著しい加

齢の効果を見いだすことができる。若者、中年、高齢者それぞれの行動は、70年代では35%→14%→11%、90年代では62%→32%→22%となっている。ここには、「お守り・おふだ」と同様、現世利益行動の増大に現代という時代の影響を見ることができるが、それに加えて、年をとるほど現世利益行動が減少するという加齢の効果も働いている。

それにしても、今の時代の若者が精神的な閉塞状況にあることがよくわかる。身も心もただちに健康になり、人生が好転すると謳い、それを教宣する新宗教。そうした宗教に若者が向かう動機の一つとして知られているのが精神的閉塞状況であり、不安の解消である。

#### 自己修養的行動

慰霊的行動や現世利益的行動が増大している反面、現代人は自己修養的な宗教行動にはあまり熱心でないようだ。図 3を見ると、「ふだんから礼拝、おつとめ、布教など」は、3種の行動のなかでもっとも関わりが低いことがわかる。それだけではなく、70年代と90年代とを比べると、中年や高齢者においては、「ふだんから礼拝、おつとめ、布教など宗教的な行ないをしている」が30年前と比べて確実に減少傾向にある。このことも、また指摘しておかねばならない重要な事実である。総じて、現代は実存的な関心が稀薄化しているといつてよいだろう。

もっとも、70年代でも90年代でも、加齢の効果は認められる。70年代に若者であった人たちの「礼拝、おつとめ、布教など」が5%であったのが、中年になって12%に増えている。この加齢の効果には、中年になって、親を亡くするという経験、自己の人生を振り返らざるをえないこと、そうした自己のアイデンティティの再確認・再確立を迫られることが大いに関与している。筆者はこれを信仰の「50歳分岐説」と呼び、実存的な志向性を期待できる年齢が50歳であることをさまざまな側面から明らかにしてきた（金児、1997）。

#### 4. 近代的価値観と宗教意識

近代に支配的であった価値観に、国家・社会・組織・集団への帰属意識と忠誠がある。国家への健全な帰属意識は郷土愛に支えられ、「愛国心」や「ナショナリズム」（国民主義）として戦後の日本の復興を達成してきた。既成宗教であれ新宗教であれ、宗教は社会における倫理・道徳の基準を提供しえたがゆえに、ナショナリズムと密接な関係にあった。図5は、「国や社会のためには、個人の生活が多少犠牲になってもやむをえない」（→愛国心）と「国や社会のためであっても、個人の生活を犠牲にすべきでない」（→個人主義）の2つの意見のいずれかの選択結果と向宗教性との関係を、大学生とその両親で比較したものである。

この図から明らかなように、両親においてのみ、「ナショナリズム」が採択された場合に向宗教性が濃厚である。逆にいえば、現代の若者においては、宗教が説く愛や宗教がもたらす倫理・道徳が、広く国家や社会を思う心情に直結しがたいことを示している。現代人の生活スタイルの特徴として、社会的・公的事象よりも私生活上の事象への関心を優先させる傾向がある。「私化」（privatization）とよばれるこうした生活態度は、宗教的共同体への志向性をますます稀薄なものにさせている。

ところで、人が宗教に近づく動機は、貧・病・争の3つであるというのがこれまでの定説であった。戦後に著しく教線を拡張した創価学会や立正佼成会などの新宗教は、まさに戦後の混乱という時代に、人びとを貧・病・争の苦しみから解放することを目指したのであった。ところが、物質的に豊かな社会にあって、なにゆえに若年層は現世利益的行動に駆り立てられ、霊魂の存在を信じるのであろうか。

周知のように、至上と思えた科学的合理主義も、近年多くの場面でその限界を露呈してきた。たとえば高度医療技術の発展は、高齢化社会、癌告知の是非、末期医療、延命医療、安楽死、さらには脳死・臓器移植など、人間の生死に関わるさまざまな問題を生み出している。地球規模の環境汚染も重大な問題となっている。科学の発達によって、科学では答えることのできな

い問題が派生しつつあるとあってよい。と同時に、個人の自律を前提とした合理主義は、あまり意識の上でのぼらないけれども深刻な問題を現代人に内包させることになる。それは「疎外感と孤独感」である。企業戦士として働いてきた中年から初老にかけての世代—今の大学生の父親たちの世代もそうである—は、合理主義のある種の破綻と経済成長の長期停滞のなかで、己の価値観の置きどころを見失っている。生きがいのヒントを宗教に求めようとしても、彼らの合理主義が既成宗教の説いてきた「天国・地獄・極楽」にリアリティを感じさせない。

若年層は親世代ほど近代合理主義の信奉者ではない。豊かな社会のなかに生まれ育ったけれども、それは自分たちが築いた社会ではない。それゆえに、親世代のような伝統的な禁欲倫理—今は我慢して未来の栄光を求め—に拘束されることはない。それどころかその栄光を消費してエンジョイすることに価値をおいている。さらに、国家的・社会的・組織的目標の喪失した今、それらへの忠誠心が稀薄となるのもまた必然であろう。組織・集団への帰属意識が稀薄化すればするほど、人は個人的な関係を重視することになる。こうした個人的関係の重視は霊魂観念と密接な関係にある。このことについて、以下に少し詳しく論じよう。

人間関係に対する見方として、「何でも相談したり、助け合える人間関係」と「お互いのことにあまり深入りしない人間関係」のいずれかが望ましいかの選択と霊魂観念との関係を、大学生男女とその父母について図示したのが図6である。この図を見ると、大学生においては男女を問わず、「何でも相談したり、助け合える人間関係」を選択した者に霊魂観念がきわめて強いことがわかる。

いずれにしても、若者のライフスタイルは、豊かな社会が産んだ新種の価値観を有している。これに対して中年から初老にかけての人びとのライフスタイルは、貧しい社会が産んだ価値観だといえる。後者の価値観—近代合理主義は、それを信奉する人びとに強い自我を要求した。これをうまく説明してくれるのが、「統制の所在」（locus of control）という考えである。科学的合理主義は個人の自律を要求するが、そ



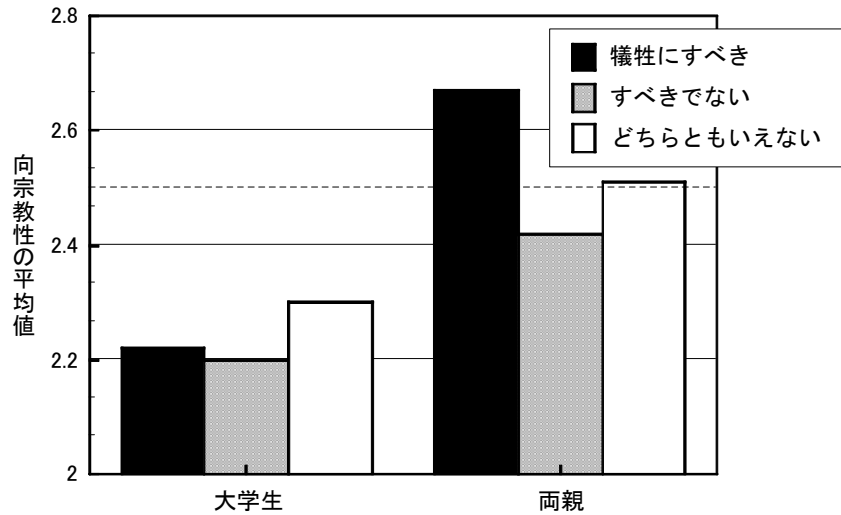


図5 愛国心と向宗教性

(注) 点線は尺度の中立点（どちらでもない）を示す

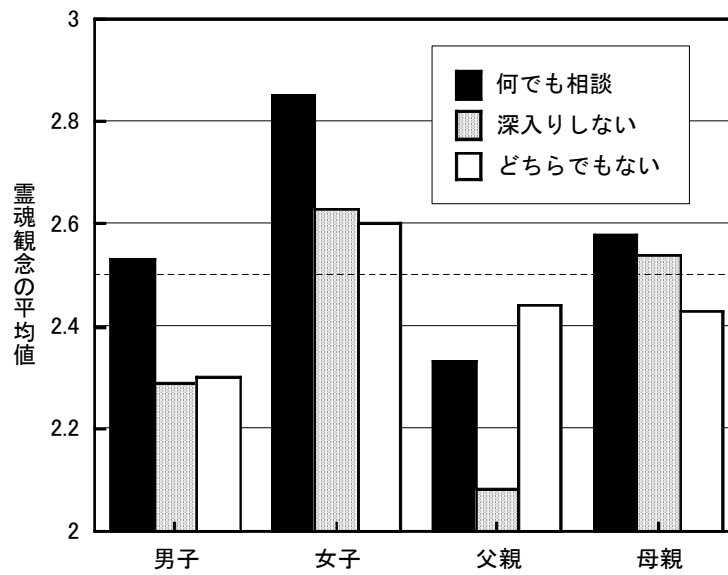


図6 人間関係観と霊魂観念

(注) 点線は尺度の中立点（どちらでもない）を示す

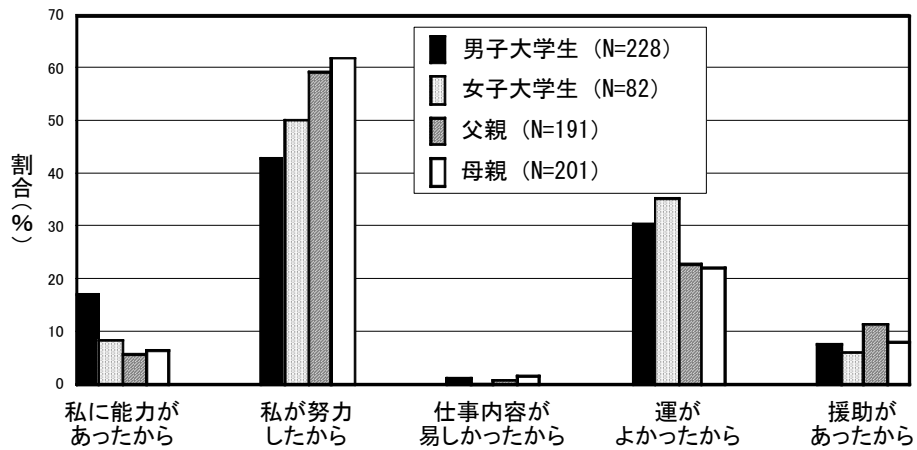


図7 成功の原因帰属

のことは、成功や失敗の原因を他者や運命ではなく、自分自身に帰属させる内的統制型の価値観を強化することにもなった。「あなたが仕事や人生で成功したとします。その成功は主に何によると思いますか」という問いに対する2世代の回答を比較すると、親世代に圧倒的に多いのは、能力と努力という2つの内的統制型のうち、努力への帰属である。ところが、子世代は努力に次いで、「運」（外的統制）への帰属が多く、とくにそれが女子に多く見られる（図7参照）。

「運」のせいにするということは、自分の身の周りに起こることが自分以外の何か（たとえば霊・術や奇跡）によって左右されている、とする解釈の体系であるが、それは合理主義とは対極にある価値観である。若者に存在するこうした価値観と、困ったときに何ものかにすがり、それに運命を託すという行動は、相互に密接な関連性があることはもう納得できるだろう。

以上に述べてきたように、若者に見られる霊魂・霊界志向の背景には、日本社会の閉塞状況、ますます強まるであろう管理社会からの脱出願望、合理性への懐疑がある。若者を中心とした非合理への志向—たとえば、霊—術的宗教への関心やオカルト志向—を一種の遊びだと見る向きもある。たしかに、映画やテレビゲームではオカルト的神話的なテーマが織り込まれ、メディアと結びついた大衆文化の側面はある。しかし、社会の変動に関連して、それだけでは片づけられない次のような問題が根底にある。

戦後、日本社会が復興を目指していた頃、不幸は大勢の人の共有するものであった。誰しもが不幸であるときには、生活満足感はないものの、その不幸をことさら嘆く必要はない。ところが、社会が豊かになればなるほど、普遍的な不幸は解決されるのであるが、山崎正和が『柔らかな個人主義の誕生』で喝破したように、「普遍的な不幸が解決されればされるほど、個別的な不幸の重みが増す」というパラドックスが生じる。個別的な不幸の特徴は、交通事故や癌に代表されるように、偶然性（→運命）に左右されるということである。さらに、生活態度としての「私化」が個別的な不幸（偶然性）にいつそう重みを加える。それゆえに、この偶然性を説明する意味体系を人は求めようとする。科学

的知による運命の説明は、たとえそれが合理的であり妥当性のあるものだとしても、普遍的解釈にすぎず、個別的な解釈が保証されるものではない。そこで人は、自己の運命の善し悪しとその好転を超自然や非合理にゆだねようとしても不思議ではない。現代の若者の現世利益志向と霊魂信仰には、こうした豊かな社会が産み出した“逆説的宗教”という側面がある。現世利益的な宗教行動は、他者と共有できない個別的な宗教的営みという意味で、現代社会でむしろ機能しやすい「見えない」宗教ともいえる。

## 注

1. 本稿は、2003年1月14日、華東師範大学における「大阪市立大学都市文化研究センター上海オフィス」開所式を記念して開催された研究会において発表・提出した原稿に補筆したものである。本稿で報告される主な資料は、1994年から1997年にかけて収集された。
2. 学術的には新宗教という。
3. 高齢者の資料は、1995年、堺市の高齢者を対象とした市民大学講座で収集された。
4. 宗教的態度を測定する尺度については、資料4を参照のこと。
5. ここで約30年前というのは、正確には20数年前である。しかし、本論で紹介する資料を収集した90年代と現在（2000年以降）とで、宗教意識や宗教行動に違いはみられない。

## 引用文献

- 金児曉嗣（1998）『今からの寺院経営学—日本人の宗教行動』月刊住職 金花舎 2月号 54-61頁  
 金児曉嗣（1997）『日本人の宗教性—オカゲとタタリの社会心理学』新曜社  
 森謙二（1993）『墓と葬送の社会史』講談社

## 資料

### 資料1 宗教に対するネガティブな意見の例

- A. 私自身は宗教は一切信じない。あらゆる宗教に対して矛盾を感じるし、金もうけ主義が見え隠れする宗教団体すらある。私は文系であるが、思考はどちらかといえば理系型だと思っている。だから、宗教というと、いつもうさん臭さを感じてしまう。(法学部1回生, 男子)
- B. 宗教に関しては、私自身ほとんど関心がない。私は宗教を現実逃避の1つの手段であると考えている。現実の苦しみや悲しみを他者に紛らわしてもらおうとする態度は、そうすれば楽になるとはわかっている、やはり取るべきではないと思う。(文学部1回生, 男子)
- C. 日常生活においてはほとんど必要のないものである。神や運命を信じてもないし、たとえ神が存在しているとしても、そんなものは何もしてくれない。私自身は神を必要としないし、多分これからもそういうものにすぎることはないと思う。(文学部2回生, 女子)
- D. 他人に迷惑をかけることがないならば、信仰は自由であると思うが、私は宗教および神の存在は信じていない。どうみても間違っていると考えられる宗教がある。宗教を信じた人びとは、集団催眠にかかったようになって、教祖の言われるがままに行動してしまうことがある。このことが恐ろしい。(工学部3回生, 男子)
- (傍点は筆者による)

### 資料2 宗教に対するポジティブな意見の例

- E. 親や親戚の影響で、私自身仏や神に対して敬虔な気持ちを抱いている。確かに、日常生活でいつも信仰によってのみ生きているわけではないが、平和に穏やかに暮らしていけるのは、ある程度仏や神の加護があるのではないかと、いう気がする。また、生や死の問題になれば、とくに死についてはその恐怖や不安を解消させるだろうと思う。宗教のいっていることは、人間の究極の理想であり、大きな不安にさいなまれたときの心の支えになると思う。(文学部1回生, 女子)
- F. 宗教は私にとっては欠かせない存在です。特別な活動をしているわけではありませんが、心のどこかで頼れるものがある気がします。「神

さまって本当にいるのか？」とか、「信じる？」とかいう問いなど生じるはずもないくらい身近な存在です。(生活科学部2回生, 女子)

- G. 現代の物質的な世界では、宗教はますます大切になっている。科学はすべての問題を解決できず、この世の謎をすべて説明することもできない。宗教の役割はここにある。(文学部2回生, ドイツ人男子留学生)
- H. 両親が昔からとても信仰深い人だったので、私も幼い頃から宗教にはとても関心がありました。先祖供養もきちんと毎日している両親を見ているうち、いろいろなことを考えるようになりました。どうして人は死んでしまうのに生まれてくるのだろうかとか、人間は生きているのではなく生かされているというけれども、もしそうならわれわれを生かしているのはいったい何だろうかとか、どうして生まれつき幸・不幸が決まっている人がいるのだろうか、などの疑問は絶えませんでした。それに対する答えがはっきりとは出ないけれど、与えられた状況のもとで自分なりに幸福を見つけるべきだと思います。(文学部2回生, 女子)

(傍点は筆者による)

### 資料3 宗教に対する中庸的意見の例

- I. 家は代々仏教徒ですが、大多数の日本人のように、クリスマスもすれば神社へ参りもするといった具合で、自分が1つの宗教の信者であるという意識はない。また、あまりに自分の倫理感からかけ離れた教えの宗教以外は、どんなものがあっても別にかまわない。自分にとって宗教とは、何気なしにしている行事や習慣であり、その教えを深く信仰したり、それについて平日頃からあれこれ考えるといったものではない。したがって、宗教の勧誘などはすべて断わることにしている。(法学部1回生, 男子)
- J. 我が家は浄土真宗に属し、一応仏教です。しかし、家には仏壇はなく、なぜか神棚があったりします。仏様に対しての思い入れなどはもちろんなく、お葬式の時や法事の時にたまたま感じるのみです。小さい頃は幼稚園がたまたまキリスト教だったせい、イエス・キリストに対する思いは少々あったような気もするけれど、それも年がたつごとに薄れてゆくばかりです。今

では、せいぜい受験前やお正月に、困った時の神頼みを都合よく行う程度です。でも、宗教はやはり心の支えになることもあるので、ある意味では大切だと思います。(法学部2回生, 女子)

K. 私自身は今、信仰している宗教というものとはとくにないし、宗教そのもので人間が救われるとは思わない。しかし、何か気が落ち着かない時や集中したい時に、そのような心のよりどころとなるものがあるというのはよいことであり、忙しい現代においても大切なことだと思う。(文学部1回生, 女子)

L. 私の家には神棚も仏壇もあるし、私もお線香をあげたりお供え物をしたりといろいろするけれども、自分が何かの宗教に入っているという感覚はまったくない。しかし、何か私たちを見下ろしている存在や、この世界とは別の世界があるように思っている。また、先祖の霊は大切にしなければならぬと思うし、お墓参りもしなければバチが当たるような気がする。(文学部1回生, 女子)

M. 私のうちの宗教は仏教の浄土宗ですが、私自身別に信念をもって宗教に接しているわけではありません。年末にはクリスマスを祝い、年始には神社に初詣に行き、たまに仏壇に手を合わせたりしますが、普段あまり宗教のことは考えません。でも、何か困った時に神さまに「助けてほしい」とお願いして、不思議と「ついている」と思うことが起こると、神さまはやっぱりいるんだろうと思います。どこかで神さま—どの宗教とは限らないが—を心のよりどころとしているのは確かです。(文学部2回生, 女子)  
(傍点は筆者による)

資料4 宗教的態度の尺度(金児, 1997より)  
向宗教性(クロンバックの $\alpha=.90$ )

- 1 信仰をもつことによって、人生の目標が与えられる。
- 2 信仰に裏打ちされた生き方こそ、人の真の生き方である。
- 3 宗教は、社会の道徳を確立し、維持していくのに必要である。
- 4 宗教心のない人は、心の貧しい人である。
- 5 信仰をもっていれば、死に直面しても安らぎの気持を持つことができる。

\*6 宗教を信じていなくても幸福な生活を送ることができる。

\*7 宗教が人生の意味を明らかにしてくれることはない。

8 宗教によって、自己の存在の意味が教えられる。

9 宗教は、心身のよい修養になる。

10 よい生活を送るためには、何らかの宗教的信仰が必要である。

11 どんなに科学が進んでも、人間は信仰がなければ幸せになれない。

12 お寺、神社、教会などから安心感を得ることができる。

加護(報恩)観念(クロンバックの $\alpha=.77$ )

13 氏神の祭りは、地域の結びつきを高めるのに必要である。

14 観音さんやお不動さんに親しみを感じる。

15 祖先崇拝は美しい風習である。

16 神社の境内にいと心が落ちつくことがある。

\*17 昔からのしきたりや年中行事には抵抗を感じる。

18 日の出を見ると、あらたまった気持になることがある。

19 お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感じる。

霊魂(応報)観念(クロンバックの $\alpha=.83$ )

20 死後の世界はあると思う。

21 死者の供養をしないとたたりがあると思う。

22 仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる。

23 水子供養はするべきである。

24 人は死んでも、繰り返し生まれ変わるものだ。

25 神や仏をそまつにするとばちが当たる。

(注)

(1) 本論で述べた尺度は4件法(1=まったくちがう、4=まったくそうだ)を使用したが、5件法や6件法でも高い信頼性が得られている。なお、質問票作成に当たっては、25項目の順序をランダムにすること。

(2) 数値の左肩の\*印は反転項目を示す。

## Changes of Japanese Modern Values and Religious Consciousness

Satoru KANEKO

Modernization is a very comprehensive concept, with various meanings. However, there is no doubt that it refers to the process in which a whole society, as well as people's values and behavior, becomes systematic, planned, functional and rational. There has been a big change in people's views on religion in Japan during the process of industrialization, urbanization and modernization. On the one hand, traditional religions ("visible religions") have seen their influence compelled to recede. On the other hand, different views on religion have been observed among the young in recent years. In this article, I will discuss the religious consciousness of so-called post-modernism in Japan.

**Keywords :** modern rationalism, pro-religiousness, belief in guardianship,  
belief in soul, religious behavior, ancestor worship